

詩を読む愉しさ

勝原晴希

確か一九九四年(平成六年)の春に駒澤大学に着任したわけだから、数えて二十七年ということになるのだろうか。赴任の年もうろ覚えであれば、在籍年数もとりたてて意識をしたことがないという、ありさまである。そのような人間であるので、あと四か月で退職という現在もなお、いっこうに実感がわかない。たくさんの学生の皆さん、教員の皆さん、職員の皆さんとの出会いがあり、新鮮な刺激をもらい、あたたかい支えをいただいている、ありがたく幸せな年月であったことに、心からの感謝を申し上げたい。ただ、辞めるということが、いまだにピンと来ないのである。これから四か月をかけて少しずつ、退職の身という気持ちに染まっていくのではあるうけれども、その四か月の間にも、その日その日のことに向き合い、行く末のことに備えるという毎日に、変わりはない。これまでの歩みを振り返ってみようという気にはいっこうにならず、振り返って思い起こすのは、わずか一週間ほどの間のことばかりだ。

なされた。わたしの担当する演習は、着任の当初は小説を対象とするものだったがのだけれども、途中から衣替えをして、現在では詩歌を対象としている。演習Ⅲの後期は、目次プランを使つての卒業論文の予定内容の説明報告、そして卒論の対象となる詩人の、これまでの演習で扱っていない詩一篇を選んでの考察を、することとしている。すでに学生は演習Ⅱの前期・後期、そして演習Ⅲの前期と、三度の発表を行つていたので、その蓄積を基として卒論を構想し、目次プランをまず作成する。卒論の下書きを書いてる間に途中で方向を見失つたり、道に迷い袋小路に入り込んだり、ということのないように、全体の構成と各章各節の要点を記した、いわば建築の設計図に当たるものである。発表者は卒論の全体の構想・内容を踏まえながら、その卒論の一部となる詩一篇についての分析・考察を述べていく。

「けんちん汁を食べてってください」(『赤牛と質量』二〇一八)は、(一月の夜道を歩き／届け物をしたサトウさんの家の居間)で(けんちん汁を食べてってください)と(おばあさん)に勧められて、熱いほうじ茶の湯呑みを両手に包んで温もりを覚えながら、けんちん汁を待つ、という詩。やがて振舞われたけんちん汁を(新幹線の先端のような表情で)ふうふうと(あっけないほど 早く食べ終え)、(わたし)は(けんちん汁を待っているあいだ)の心の状態を(あれを幸福と呼ぶのだろうと思う)と語つて、詩は終わっている。

詩の全体を引用しなければ説明しがたいのだが、発表者は一行一行をていねいに読み込んでいく。そして演習の参加者がそれぞれ、気づいたこと、感じたことを述べる。発表者の報告が具体的な生き生きとしたもので、参加者の発言も生きたものとなつて来る。タイトルがすでに詩の質を示しているのだけれども、この詩の主眼は発表者が指摘するように、(あたたかさ)にあるだろう。(サトウさん)は十中八九「佐藤さん」であろうのに(サトウさん)と表記されることにも、それは表れている。詩の終わり四分の一ほどを引用しよう。

浮生という言葉が李涉の漢詩にある

はかない生という意味だそうだ

その字義どおり

生は浮いている

けんちん汁を待っているあいだ

わたしは何者でもなく この世に在った

在ったというより浮いていたのだ

心の上半分が 浮世の水面に

あれを幸福と呼ぶのだろうと思う

発表者の報告によれば、「中国の晩唐の詩人である「李涉」が書いた「題鶴林寺」という詩の中に「浮生」という言葉がある」。次のような詩である。

終日昏昏醉夢間 忽聞春尺強登山

因過竹院逢僧話 又得浮生半日閑

〈わたしは何者でもなく この世に在った〉について、幾人もの意見があった。詩の中に〈生きていると／主語と目的語を入れ替わることがある〉とあって、その箇所と関係しているのではないかという意見があった。熱いほうじ茶の湯呑みを両手に包んで温もりを覚えながら、〈あたためられているのはわたしなのに／わたしがあたためているようにも錯覚して〉につづく箇所である。すっきりと論理的に説明することはできないが、その通りではないかと思

う。〈わたし〉が人間であり、〈湯呑み〉が器物であるという区別が失われることによって、〈主語と目的語が入れ替わる〉ことが出来る。〈けんちん汁を待っているあいだ／わたしは何者でもなく この世に在った〉というとき、〈わたし〉は、どこの誰、ということから解き放たれている。〈わたし〉が人間であり、〈湯呑み〉が器物であるという区別が失われているのであるから、人間であることすら、忘れられている。だから、ただ〈在った〉のだ。だが、〈在った〉というより浮いていたのだ」という。

〈浮生〉とは〈はかない生という意味〉というより、〈その字義どおり／生は浮いている〉ということだろう。発表者の言葉を引用すれば、「『浮世』も『水面』も、定めがなくどこかゆらゆらとしているイメージを持ち、「心の上半分」がふよふよと漂っているように感じる」。わたしたちはふだん、〈何者〉かとして〈この世〉に在る。在るといふより、この世に結び付けられている。どここの、だれだれである、というこの結ばれを分かりやすく言えば、戸籍とか住所とか職員証とか国民番号とかになる。その結ばれがほどこけて、〈浮生〉ならぬ〈浮世の水面に〉ふよふよと漂っていた。〈在ったというより浮いていたのだ〉。そのような状態が、〈幸福〉と呼ばれている。〈一月の夜道〉の冷たさを前提として、〈サトウさん〉の〈おばあさん〉の〈けんちん汁を食べてってください〉というあたたかさ、〈ほうじ茶〉のあたたかさが、だれもが知っているであろう、ささやかな〈幸福〉を生み出している。

木曜日には、国語国文学演習Ⅰ（二年次）があった。演習Ⅰでは、まず発表報告のスタイルを身につけること、そして詩を読むとはどういうことか、そのイメージを理解することを、主眼としている。なにしろ駐車場の契約書を正確に理解することが、国語の学習内容になろうかという時代である。言葉というものが生き物であり、肌触りや温も

りを持ち、記憶の深みや未来への開かれをも持っているのは、言葉と人間とが同義だからであろう。言葉が記号になりゆくのは、生活が記号化されることによって、わたしたち人間が記号になりゆくことと一致している。だからこそいっそう、言葉というものが、汲み出そうとすれば無限に意味を汲み取ることの出来る、わたしたちと同じ生き物だという感覚が、大切になって来る。平たく言えば、書いてある通り、書かれてある通りというのではなく、言葉を生き生きと読む、という感覚であり、イメージである。

わたしの演習では、対象とする詩人と詩作品を、学生が自ら選ぶこととしている。発表者が取り上げたのは、宮澤賢治「暁穹への嫉妬」(『春と修羅 第二集』)であった。発表者はすでに前期に宮澤賢治「休息」(『春と修羅』一九二四)を考察の対象としていて、これも詩を丁寧読み解いた優れた内容だった。演習Ⅰには、詩が好きですすでに研究したい詩人が決まっている人と、詩に興味はなくどの詩人を選んでよいか分からない人とがいる。けれども演習を重ねるにつれ、後者も少しずつ、あるいは飛躍的に前者に近づいてくる。詩を読むのにいちばん助けになるのは、たくさん詩を読むということだから、演習でいろいろな詩を読むことで、だんだん読むということのイメージが分かって来る。

発表資料であるレジユメは、発表の一週間前に提示することとしている。略年譜、評価、代表詩集、作品分析、総論(まとめ)、参考文献、参考詩・参考資料、という構成である(演習Ⅱ・Ⅲではこれにテーマが加わり、三篇の詩を扱う)。参加者も発表の前にそのレジユメを読んでおく。今回のレジユメも、丁寧に作成されていた。次のような詩である。

薔薇輝石や雪のエッセンスを集めて、
／ひかりけだかくか、やきながら／その清麗なサファイア風の惑星を／溶

かさうとするあけがたのそら／さつきはみちは渚をつたひ／波もねむたくゆれてゐたとき／星はあやしく澄みわたり／過冷な天の水そこで／青い合図あひづをいくたびいくつも投げつてゐた／それなのにいま／（ところがあいつはまん円なもんで／リングもあれば月も七つもつてゐる／第一あんなもの生きてゐないし／まあ行つてみるこそぞぞぞ）と／草刈が云つたとしても／ぼくがあいつを恋するために／このうつくしいあけぞらを／変な顔して見てゐることは変らない／変らないどこかそんなことなど云はれると／いよいよぼくはどうしていゝかわからなくなる／……雪をかぶつたはびやくしんと／百の岬がいま明ける／万葉風の青海原よ……／滅びる鳥の種族のやうに／星はもいちどひるがへる／（一九二五、一、六）

〈その清麗なサファイア風の惑星〉を、発表者は地球のことととらえ、「宇宙に存在する太陽の光を受け、明け方の空がヴェールのように広がり、地球を丸ごと包みこんで、溶かそうと言わんばかりに照らしている、というような大きさが感じられる」とした。この詩の文語詩形である「敗れし少年の歌へる」に（ひかりわなくあけぞらに／清麗サファイアのさまなして／きみにたくへるかの惑星ほしの／いま融け行くぞかなしけれ）とあるのを見ても、地球とは異なる惑星を指していると考えたほうが良いだろう。とはいえ発表者の描くイメージは壮麗で、この詩（賢治の場合、心象スケッチと呼ぶべきだが）の質にかなっている。繰り返しの引用になるが、「宇宙に存在する太陽の光を受け、明け方の空がヴェールのように広がり、地球を丸ごと包みこんで、溶かそうと言わんばかりに照らしている」情景を思い浮かべると、宗教的な法悦に似た壮大な喜びに包まれる思いがする。「銀河や宇宙に対する憧れのようなものが強く表れている詩」であり、「全体である宇宙の中に溶け込む星に、個として憧れているのだと感ずる」とする発表者は、〈その清麗なサファイア風の惑星を／溶かさうとするあけがたのそら〉への嫉妬を歌う宮澤賢治「暁穹への嫉妬」の

言葉を、妬ましさにも悩む生き物であるかのように感じ取っている。

土曜日には、国語国文学演習Ⅱ（三年次）があった。演習Ⅰで発表のスタイルに慣れ、詩を読むことのイメージをつかむと、次にはその詩人の詩の特徴を考えることになる。そしてその特徴を論じるために、なんらかのテーマを設定し、設定したテーマにふさわしい詩を三篇選んで、発表報告をする。特徴を考え、テーマを設定するためには、その詩人の詩を理想としてはすべて読んでいなければならぬ。うまくテーマを設定できるかどうか、重要になって来る。今回、選ばれた詩人は三角みづ紀。設定されたテーマは「共感性」。「ただただ、自らの苦痛をストレートに、暴力的ともいえる程に叫んでいる」詩が、「なぜ現代の若い世代の共感を得ることとなったのか」と、発表者は述べている。今回の発表では困難なことがふたつあり、ひとつは現代詩人の場合、その特徴を考えるのに必要なデータが少ないということである。略年譜を作ろうにも分かっていないことがあまりにも少ないし、評価も研究者のものも皆無に等しく、詩集の解説などがいくつかあるだけ。代表詩集を選ぼうにも詩集の数もまだ少ない、という場合もある。もうひとつは、詩人とその詩について考えるだけでなく、「現代の若い世代の共感」についても調べ、考える必要が出てくる、ということだ。

選ばれた詩は「私を底辺として。」「マグノリア」「ヒューストン」の三篇。いずれも『オウバアキル』（二〇〇四）に収録されている。オウバアキルをWebで検索すると、過剰殺傷、必要以上の核兵器破壊力などの意味があり、アメリカ出身のスラッシュメタル・バンドの名前でもあるという。その言葉は、不安と防衛の意識による過剰な攻撃、敵意を感じさせるものだけでも、〈オウバアキル〉という詩集のタイトルをどのように受け止めるかは、読者によつ

て異なるだろう。「私を底辺として。」の第一連は、次のようである。一行目には句点があり、一行目と二行目以下との関係をどう考えるか、という問題が出てくる。

私を底辺として。

幾人ものおんなが通過していく

たまたに立ち止まることもある

輪郭が歪んでいく、

私は腐敗していく。

第二連は一転して〈きれいな空だ／見たこともない青空だ〉と、〈私〉のまなざしは上方に向けられるが、涙は蒸発して雲になり、〈我々を溶かす酸性雨〉となる。〈私〉は腐敗していき、どろどろになり、悪臭漂い、〈君の堆肥となる〉。そして、

そつと太陽に手を伸ばす

腕、崩れる

と詩は終わっている。小池昌代「けんちん汁を食べてってください」のあたたかさとは、まったく相いれない世界、と思われるけれども、〈腐敗していく〉〈私〉は、〈きれいな空〉〈見たこともない青空〉を見上げ、涙を流し、〈そつと太陽に手を伸ばす〉。にもかかわらず〈腕、崩れる〉ということの、酷さ、哀しさが、際立つ。いつてみれば〈私〉には、〈わたしは何者でもなく この世に在った／在ったというより浮いていたのだ〉という〈幸福〉が、かなえられないのだと、思う。むしろ、その前提としての結ばれが、かなえられない。この〈私〉の場合、〈何者でもなく

この世に在った／在ったというより浮いていた」ということが、結ばれから解かれるのではなく、そもそも結ばれることがない、今ここにいる〈わたし〉として認知されない、ということとしてある。〈何者でもなく、この世に在った／在ったというより〉、〈底辺として〉、〈腐敗していく〉のだ。ここにあるのは、過剰な敵意、攻撃性というより、むしろ祈りであり、ひりつくような哀しみであるだろう。

発表者は三角みづ紀の詩が若い世代を引き付ける理由を、「親ガチャ」という言葉を引き合いに出しつつ、現代に蔓延する不条理への「共感性の高さ」にある、とする。「マグノリア」という詩は、〈あなたのご意見によるとわたしは無駄のかたまりらしい〉と、〈わたし〉の存在を否定する〈あなた〉に、〈仮定の上で〉〈命日〉を与えようとするもの。「ヒューストン」という詩は、〈不安は要りませんか／私の不安／少し分けてあげましょうか〉と始まり、〈ヒューストン／ヒューストン／私の声は届きますか／私の不安は届きますか〉と繰り返す。三角みづ紀の詩が、現代社会の息苦しい閉塞性、逃れようのない抑圧性に抵抗するものとしてあることは、確かだと思われる。詩の言葉を発表者は、辞書的な意味を踏まえつつ、棘を持ち毒を含みながらも、苦痛に転げ、苦しみもがく、哀しい生き物として感じ取っている。

そのようにして年度によって曜日に違いはあるものの、週に三日、学生の発表を聞き、参加者の意見に耳を傾け、たくさんの詩人と詩作品について考え、語り合うことが出来たのは、本当にありがたい、幸せなことだった。もちろん演習だけではなく講義科目も、幸せな時間だった。出来るだけ多くの学生に詩の愉しさに触れてもらいたく、三年に二度の輪番である国文学史Ⅱの講義を、お願いして毎年、担当させていただいた。

たとえば「ああ！」という声場面によって喜びの吐息にもなれば、哀しみの嘆声にもなるように、言葉は必ず具體的な場面で使われ、その場面によって表情を変える。詩の言葉は小説に比べて数が少ないので、小説のように自ら場面を作り出すことが十分にはできず、読者の想像力にゆだねられる度合いがおおきい。

あるひとつの詩を読んだときには見えていなかったことが、同じ詩人のたくさんの詩を読むことで見えてくることがある。その詩人の詩の群れが場面を構成し、あるひとつの詩の意味を膨らませているわけだ。そのようにして、詩人の人生、詩人の詩のとらえ方、同時代の出来事や詩の広がり、詩の歴史やこれまでの詩の流れもまた、詩を読むときにその詩をそこに置く場面となる。文学史とは単なる知識ではない。明治になって新体詩として新しく誕生した、西洋由来の詩の、成長の歩みである。誕生した子どもがさまざま可能性の中からやがてひとつの歩みを定めていくように、新しい詩は未来をまさぐりながら自らを詩として形成していく。その流れの中に詩を置いてみる。すると詩の見え方が変わる。

詩を読む愉しさを増すために、詩の歴史を知ろう、というコンセプトなのだけれども、明治の詩は文語で読みづらく、口語自由詩が一般化する大正時代にたどり着くまでは、どうしてもなじみづらい。詩に対する興味を持ってもらうために、最初に詩を読むためのポイントを説明した後、中島みゆきの「時代」を読むことから始めるようにしている。この歌を知らない人はないといってよいくらい知られていて、大好きだという人も多いので、興味を持ってもらうのに最適である。さらに中島みゆきが影響を受けた谷川俊太郎、谷川俊太郎が影響を受けている宮澤賢治へと、話のつながりをつけていくことも出来る。

タイトルは詩の重要な一部であり、詩を読む方向を示すと同時に、詩の全体をとり収める。初めにタイトルを見た

ときには一般的な意味しか伝わってこないが、読み終わってもう一度タイトルに戻ると、その表情が変わっていることに気づく。「時代」というタイトルを、あなたはどのように受け止めたか、と課題を提示して、詩の読みに入っていく。

今はこんなに悲しくて

涙も 枯れ果てて

もう 二度と 笑顔には

なれそうも ないけど

「時代」の歌詞を書いたのは中島みゆきであり、歌っているのも中島みゆきだが、「今はこんなに悲しくて」と語っているのは、そのように語っている何者かであって、中島みゆきではない。〈今〉は歌われるたびに立ち現れる現在であり、〈こんなに〉とは立ち現れる現在における語り手の状態を指すが、観客がいるとして彼らは、目の前で悲しみを見せている歌い手の様子としてとらえる。この歌を歌うたびに中島みゆきが、涙も枯れ果てるほど悲しんでいるわけではないのだが、この歌を歌うたびに中島みゆきは、悲しんでいる当事者として振舞っている。

一般に歌詞の書き手と歌い手と語り手とは異なっている。そうであるとして、さてこの語り手は、少し奇妙ではないだろうか。〈今は〉という語り出しそのものがすでに、〈けど〉を介して、〈そんな時代も あったねと〉話せるような〈いつか〉を予想し、〈きつと 笑って 話せるわ〉と、そのような未来が来ることを確信している。二度と笑顔にはなれそうにないほど悲しんでいる者が、あらかじめそのような未来を、確信をもって予想し、〈くよくよしないで〉と自らに言い聞かせるのは、いささか不自然であり、違和感が残る。その違和感は、歌詞の進行につれて、いつ

そう募っていく。

まわる まわるよ 時代は回る

喜び悲しみ くり返し

今日は別れた 恋人たちも

生まれ変わって めぐり逢うよ

涙も枯れ果てて二度と笑顔にはなれそうにないほど悲しんでいる者が、このように語ることは、ますます奇妙である。この語り手はまず、自ら悲しむ者として立ち現れ、ついでその悲しむ者から抜け出して、寄り添うように励ますように語り、さらにズームアウトして、遠い高みから、それぞれの出逢いと別れにそれぞれの喜びと悲しみをくり返す、幾組もの恋人たちのことを語る。このとき、〈時代〉の意味も変わって来る。〈そんな時代も あったね〉〈あんな時代も あったね〉というときの〈時代〉は、ひとりの人の人生における、ある一時期を指すだろう。その時代が過去のことであれ、たとえば「いつか日の当たる時代も来るさ」のように未来のことであれ、時間は直線的に流れている。ひとりのひとの誕生から成長、老い、そして死へと不可逆的に流れる時間である。時代は変わると言い、時代は移ると言う。だが「時代は回る」とは、ひとりの人のこととしては、あまり言わないだろう。時間が循環するもの

に変わっている。

かつて中島みゆきで演習の発表をし、卒論を書いた学生がいて、それが「時代」の歌詞をじっくりと読むきっかけになったのだが、その人は「生まれ変わって」を、生まれ変わったように新しい気持ちで、と解した。それが間違っているというのではないけれども、詩の言葉はまず書かれている通りに解したい。それに、生まれ変わったように新

しい気持ちで、というのであれば、新しい恋人に会うとしても、別れた同じ恋人と再び会うことにはならないだろう。生まれ変わったように新しい気持ちで、という意味に、文字通り生まれ変わって、という意味が重ねられている。悲しんでいる当事者であることと、寄り添う者、俯瞰する者が、重なっているように。

さらに歌詞は展開し、〈旅を続ける 人々は／いつか故郷に 出逢う日を〉とつづく。これも奇妙な言い方である。故郷は戻るものでこそあれ、出逢うものではないからだ。この言い方が成り立つためには、故郷は現実的な実際の故郷ではなく、いわば魂の故郷であり、それがどこに、どのようにあるのかも、分からないものでなければなるまい。出逢って初めて、ああここが故郷だったと気づくような。そして〈たとえ今夜は 倒れても／きつと信じて ドアを出る／たとえ今日は 果てしもなく／冷たい雨が 降っていても〉という表現は、冷たい雨の降る夜に、旅の途中の戸外で死ぬことを示唆している。〈今日は倒れた 旅人たちも／生まれ変わって 歩きだすよ〉という〈生まれ変わって〉もまた、生まれ変わったように新しい気持ちで、という意味とともに、文字通りの転生、死と再生を示しているだろう。

中島みゆき「時代」の語り手は、ひとりの悲しむ者として現れ、その者に寄り添い励ます者となり、数えても数えきれない多くの悲しむ者たちを包み込んで、恋人との、そして故郷との別れと出逢い、悲しみと喜びを、悲しみの切実さと喜びの可能性を歌う。そして人を、ひとつの生という直線的な時間だけではない、繰り返される生という、循環する時間の場所へと誘う。どんなに深い悲しみであっても、循環する時間の重なり、いつかきつとあたたかく溶かされるだろうというメッセージが、伝わってくる。こうして「時代」の歌詞を読み、語り手の語りにつくりと耳を傾けた後、ふたたびタイトルに戻ると、「時代」という言葉の表情が、読む前とは異なり、深く大きくなっている

ことを感じるはずである。

一年次必修である基礎国文学Ⅱは、三つのクラスが基本的には同一内容である必要がある、詩ではなく小説を中心としていたのだが、小説を読むこともまた愉しいものであることは、言うまでもない。ただここでは、基礎国文学Ⅱで取り上げた、詩の話を書き留めておこう。金子みすゞの「土」（『空のかあさま』）である（原文総ルビ）。

こつつん こつつん

打たれる土は

よい畠になつて

よい麥生むよ。

朝から晩まで

踏まれる土は

よい路になつて

車を通すよ。

打たれぬ土は

踏まれぬ土は

要らない土か。

いえいえそれは

名のない草の

お宿をするよ。

学生たちに対して、あなたは「土」をどう読むか、という問いかけをすると、少なからぬ数の人たちが、この詩を人間のこととして読み替えてしまう。打たれたり、踏まれたり、そのように鍛えられて苦労して、社会の一員として立派になり、人の役にも立つ、それでは打たれも踏まれもしないものは役に立たないのか、いやそんな人でも見えなるところで誰かの役に立っているのだ、というふうには。間違っているとは言わないけれども、それではこの詩を読んだことにはならないというか、この詩を読んだかいないかと思う。詩の言葉は、いやどんな言葉でもそうなのだが、まずその言葉のとおりに読んでみるのでありたい。この詩は〈人〉の詩ではなく、〈土〉の詩なのである。

金子みすゞの詩は童謡として書かれたものが多く、子どもへの語り掛けであったり、子ども自身が語り手であったりするので、とても読みやすい。ただ、分かりやすいと思うからだろうか、丁寧に読まれていないと感ずることがある。土は耕されて〈よい畠〉になり、〈よい麦〉を生む。朝から晩まで人に踏み固められた土は、〈よい路〉になつて車を通す。読めば確かに意味はすぐ分かるのだけれども、ここにある〈よい〉というのは、人間にとつてなのだ、というのを忘れてしまう。土そのものは〈よい畠〉〈よい路〉である必要などなく、ただ土でありさえすればよいはずである。

第三連の〈打たれぬ土は／踏まれぬ土は／要らない土か。〉というところで、要る・要らないを測る物差し、転換がある。第一・二連の〈よい畠〉になり〈よい路〉になる土は、人間にとって有用であるという物差しによって〈要る〉と判定されるものであり、畠にもならず路にもならない土は、人間にとっては〈要らない土〉のはずである。だが語り手は、最終連の〈いえいえ〉という言葉によって、その土が〈要らない〉ものではないことを示している。このとき、人間にとつてという物差しは、退けられている。〈名のない草の／お宿をする〉土は、〈お宿をする〉ことによつて、〈名のない草〉にとつて〈要る〉ものとなっている。〈要る〉〈要らない〉を測る物差しが、第三連を挟んで違うものになっているのである。

語り手は、自分たちにとつての〈要る〉〈要らない〉をしか測ろうとしない人間の物差しに、疑いの目を向けていると、判断される。人間にとって有用ではないからといって、そのものが無用であるというわけではない。〈名のない草〉の役に立っている〈土〉は、この世界に〈要る〉ものである。ここに出てくる〈名のない草〉について考えるのには、次の詩がヒントになる。

人の知つてる草の名は、／私はちつとも知らないの。／人の知らない草の名を、／私はいくつも知つてるの。
 ／それは私がつけたのよ、／好きな草には好きな名を。／人の知つてる草の名も、／どうせ誰かがつけたのよ。／／ほんとの名まへを知つてるは、／空のお日さまばかりなの。／だから私はよんでるの、／私ばかりでよんでるの。〔草の名』『空のかあさま〕。

〈人の知つてる草の名〉は、〈ほんとの名まへ〉ではない。観賞用であれ食用であれ、ただ人に認知されたものに、名前が付けられているに過ぎない。それは、人の物差しによるものである。人には有用とされない打たれず踏まれぬ

土が、人に名前も付けられていない草の〈お宿〉になっているのは、だから、人の物差しとは関わりのないところで働きであるということになる。これを、土は人の比喻であり、どんな人も何かの役に立っている、という詩だと読むのであれば、結局、人間にとってという人間中心の発想、人間の物差しに戻ってしまうことになる。人間の役に立たないものでも〈草〉の役に立っている、と読むのも足りない。打たれなくても踏まれなくても、〈土〉はそのままで〈草〉の役に立っている。打たれず踏まれなからこそ、柔らかな〈お宿〉になれるとも言える。いずれにせよ打たれること、踏まれることは、〈土〉にとつて余計なことである。

そう読むと、〈こつつん こつつん打たれる土〉、〈朝から晩まで 踏まれる土〉の、声にならない悲鳴が、聞こえてくるような気がする。そのように感じるのだが、詩を、詩の言葉を、生き物として感じることである。金子みすゞの詩に、弱者へのあたたかいまなざしを読むのは、間違っているわけではないけれども、その詩の世界を人間のこととして置き換えてしまうならば、人間中心主義を相対化している詩の性質を、捉えそくなってしまふ。たとえば「私と小鳥と鈴と」(『さみしい王女』)の「鈴と、小鳥と、それから私、／みんなちがつて、みんないい。」を、どんな人にもそれぞれに良いところがある、と人のこととして読んでしまうと、人間と生物と無生物とを等しいものとしていることの意味が、失われてしまふ。よく知られている「大漁」(『美しい町』)も、大漁に祭りのように賑わっている浜の人たちと、海の中で何万の殺された仲間を弔う鰯との対比になっているので、この詩を、喜びの一方には弱者である犠牲者がいる、と捉えるだけだと、意味がずれてくるだろう。

金子みすゞは毎年、誰かが演習で扱い、卒論の対象としている。「土」も「草の名」も、演習そして卒論で学生が

取りあげた詩である。そのたびに金子みすゞのさまざまな顔が、見えてくるように思う。ほかの詩人についても同様だが、演習Ⅰ、演習Ⅱ、演習Ⅲ、そして卒論と、次第に学生の対象へのまなざしが深まってゆく。その発表を聞き、参加者の発言に立ち会い、どれほど多くの詩人、多くの詩に向き合ってきただろうか。重複があるので正確には分からないが、単純に卒論十五〜二十本のうち、重複を除いて対象となる詩人が十人として、二十年で二百人ということになる。詩は演習Ⅰが一篇、演習Ⅱが三篇、演習Ⅲが三篇を対象とするので、計七篇（履修者の人数などで違ってくるが、前期後期の二回発表だと計十四篇）。七篇に十五〜二十人を掛けると、百五〜百四十篇。これに二十年を掛けると、三千〜四千の詩ということになる。あてにならない計算で、まるで田村隆一の「四千の日と夜」のようだが、重複があるのでかなり減るだろうとしても、とにかくたくさん詩を読んできたことは確かである。

わたしひとりであっても、多くの詩を読むことは可能だっただろう。けれどもひとりであつたら、これほど多くの詩について、深く考えるということ、さまざまな味わいを知ることとは、出来なかつただろう。発表者の読みがあり、参加者の読みがあつたからこそ、詩を読む愉しさに、ともに立ち会うことが出来た。わたしひとりでは思いつかない受け止め方、視点の持ち方、その多様性、意外性があつて、いつも多くの発見があつた。それは講義の受講者の感想や意見、反応についても同様である。詩の面白さをうまく伝えられたかどうかは分からないが、そうやって詩（そして小説）を読む愉しさを、三十年近くにわたって味わい続けてこられたことは、何よりの幸이었다。まだ退職の実感はわからないのだけでも、職員の皆さん、教員の皆さん、学生の皆さんに、心からの感謝を申し上げます。本当にありがとうございます。